

2003  
春号  
3月～6月  
プログラム



Elderhostel —世界を舞台に楽しく学ぶ大人の教室—

# エルダラーの旅便り

発行 特定非営利活動法人エルダラーホステル協会 〒552-0021 大阪市港区藤港2-B-24 piaNPO 404 TEL.06-4395-1222 FAX.06-4395-1225  
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前6-23-13-5D TEL.03-5469-0681 FAX.03-5469-0682 <http://www.elder.or.jp>

## 軽井沢での秘かなる楽しみ。

### 非日常と日常のミスマッチ

軽井沢に仕事と住まいを移して今年で11年目。そろそろこの町の住人として根を張った暮らしができてよさそうなものだが、なぜかここがまだ自分の生活の場であるという意識を持ってない。

町人かで空き家を借りたり、友人の別荘で週末を楽しんだり、この町には若いころから親しんでいた。たまたま結婚した相手がこ

この出身であったことから、30代にはちょっと長い休みがとれるたびに、仕事を終えたその足で軽井沢を訪れることが、このうえない楽しみになった。

若いころは、ちょっとお洒落な気分を満たしてくれる町として、そして、そういう場所を持っているという淡い優越感を抱ける町が軽井沢だった。

そのころまだ元気だった私の祖父は、

私が「今度の休みは軽井沢に行く」と話すたびに「イヤー、贅沢だね!」と感想を漏らしていたことを思いだす。行ったことがないにも関わらず、贅沢だという印象を持たせるほどのステイタスを築いている町というもめずらしい。

10年も住んでいて、まだ長期滞在者のような眼でこの町をとらえているのは、ここに「異空間」を感じてい

るせいである。スーパーや病院など、本来生活臭がブンブンしているよさそうな場所でさえ、なぜか遊び感覚で行けてしまう。日常が非日常的に楽しめるのである。

### 軽井沢。ここはよそ者のユートピア

なぜ「異空間」を感じるのか。第一に思いつくのは、東京で生まれ育った私から見ると人口密度が極端に低いことである。特に別荘エリアは、家はたくさんあるが当時住んでいる人はほとんどいない。あたりまえのことであるが、これはかなり奇妙な景観である。

第二に、私を含め「よそ者」が一般的であること。シーズンになれば、はるかによそ者のほうが多くなる。だから隣り近所(といってもかなり離れているが)の関係が通常の田舎より軽く、都会のマンション暮らしより薄くない。これによってかなり心地よい近隣との人間関係が築ける。

第三は、標高1000メートルという高原。深い霧と木立に包まれた洋風建築が見え隠れする風景に出会うと、一瞬自分がどこか知らないところにいるかのような不思議な思いをすることがある。

平地との気圧差がもたらしたものか、はたまた超常現象なのか、東京から疲れてここに帰ってくると、ぐっと元気になるという経験を何度もしている。

こういった要素が渾然一体となって、東京にいたときは違う生活感を私に与えている。ここには肩ひじを張らず自然体で生きていくことを無理なくさせてくれる何かがあるような気がする。

たぶんこれからも私はこの「異空間」にとっぶり浸かりながら、長期滞在者として軽井沢の暮らしを楽しんでいくことになるだろう。

\*軽井沢講座「入門コース 教会のある風景」(4/19～20)はすでにキャンセル待ちとなっています。次回の「軽井沢に魅せられた人びと ヴォーリズと堀辰雄」(7/4～6)については、次号に掲載します。お楽しみに。

### 新井 敬二 Arai Keiji

軽井沢講座コーディネーター

1994年以来、奥様の由利さんと二人三脚で40講座近くをコーディネートし、400名余りのホステラーを受け入れた経験をもつ。冷静で、かつホスピタリティのあるコーディネーターぶりにホステラーの新井ファンも少なくない。「いするの家」を切り盛りするかわら、エルダラーホステル協会の理事も務める。

